

論 文

支謙訳『義足経』解説研究(二)

京都光華女子大学教授

加 治 洋 一

前号では、『義足経』全十六経中第一経から第三経の試読を試みたが、引き続き、第四経から第七経の試読を進める。

なお、前回記すのを失念してしまったが、本稿は、途中メンバーの入れ替わりがあったり、時に中断したりしながらも、永年継続している漢訳仏典研究会の成果報告でもある。支謙訳『義足経』に取り組み始めてからのメンバーは、諸般の事情で若干の出入りはあるが、阿賀谷友宏、佐々木宣祐、佐藤智岳、富田真理子、中井亮介、中西麻一子、名和隆乾、能美大地、古川洋平、横山剛の諸君である。性頼情な小生を、兎にも角にも机に向かわせてくれた研究会参加者の皆さんに衷心より感謝の意を

捧げたい。

凡例を再掲する。

凡例

- 一、底本には『大正新修大藏経』第四卷所収の「佛説義足経」を用いる。ただし、返り点は省略し、パシクチュエーションは部分的に変更した。
- 二、漢文の書き下しについて。
  - ・できるだけ原文そのままを書き下すが、古典漢文（取り分け支謙の訳文）は、原文のままでは文意をとりづらいことが屢しばある。誤解を招きかねないような箇所には本文にない字句を「」で補った。

また、会話文には「」を附した。

・なお、地名や人名など、音写された固有名詞の原語を示すことは、却って煩瑣になるので省略した。

・原則、伝統的な漢文訓読のルールに従うが、時に異なった訓みを採用する。その場合は可能な限り註に根拠を示すこととする。

\* \* \* \* \*

#### 摩竭梵志經第四<sup>(1)</sup>

聞如是。佛在舍衛國祇樹給孤獨園。時有一梵志。字摩竭卒死講堂。同學便著床上。共昇出於舍衛里巷四街道。擧聲言。見摩竭者悉得解脫。今見死屍亦解脫。後聞名者亦解脫。諸比丘食時悉持應器。入城求食。時見梵志說摩竭功德如是。食竟悉澡應器。還到佛所。作禮竟皆就座。即爲佛本末說如是。佛因是本演是卷。令我弟子悉聞解。廣爲後世作明。令我經道久住。說(178a)是義足經。

#### 摩竭梵志經第四

聞きしことは是くの如し。佛、舍衛國 祇樹給孤獨園に在しき。

時に一梵志有り。字は摩竭。卒に講堂に死す。同學、便ち床上に著き、共に昇ぎて舍衛の里巷四街道に出でて、聲を擧げて言く、「摩竭を見たる者は、悉く解脫するを得たり。今、死屍を見るも亦た解脫し、後に名を聞く者も亦た解脫せん」と。

諸比丘、食時に悉く應器を持して城に入り、食を求む。時に、梵志の摩竭の功德を説くことは是くの如し。食し竟りて悉く應器を澡ひ、還りて佛の所に到る。禮を作し竟りて皆座に就き、即ち佛に本末の説を爲すことは是くの如し。佛、是の本に因りて是の卷を演べたまふ。「我が弟子をして悉く聞解せしめ、廣く後世の爲に明と作り、我が經と道とをして久住せしめん」とて、是の義足經を説きたまふ。

我見淨無有病 信見諦及自淨

有知是悉可度 苦斷習證前服<sup>(5)</sup>

見好人以爲淨 有慧行及離苦

點除凶見淨徑 斷所見證至淨

從異道無得脫 見聞持戒行度

身不汚罪亦福 悉已斷不自譽

悉棄上莫念後 有是行度四海

直行去莫念苦 有所念意便縛

常覺意守戒行 在上行想彼苦

念本念稍入行 不矯言審有點

一切法無有疑 至見聞亦所念

諦見聞行力根 誰作世是六衰

不念身不念尊 亦不願行至淨

恩怨斷無所著 斷世願無所著

無所有爲梵志 聞見法便直取

姪不姪著汚姪 已無是當著淨

佛說是義足經竟。比丘悉歡喜。

(一) 我れ淨にして病有ること無きを見る 信に諦を

見なば自ら淨なるに及ぶ

是れを知る有らば悉く度す可し 苦斷じて習せ

は前に服せしを證す

(二) 好き人を見て以て淨と爲し 慧行有りて離苦に

及べば

黠もて凶を除きて淨き徑を見 所見を斷じて至

淨を證さん

(三) 異道に従はば脱を得る無し 見聞・持戒・行度

(1) 宋・元・明の三本は「志經」の二字を欠く。

(2) 宋・元・明の三本は「以」とする。「以」でも文意は問題なく通じるが、「昇」の方が文脈はなめらかである。

(3) 應器 乞食用の鉢。

(4) Cf. Sh.1788-795.

(5) 宋・元・明の三本には「證前形」とある。こちらを採ると「前に形せるを證す」となる。『大正』の「服」もこの文脈は「努めて為す」ほどの意味であり、ほぼ同義。

(6) 宋・元・明の三本は「捨本念」とする。こちらを採ると「本念を捨して」となる。こちらでも「本念」の内容は変わるが意味は通じる。

(7) 漢籍では「黠」の字は「惡慧」「惡賢さ」の意味で使う方が普通であるが、ここでは仏教以外の「善慧」を意味する。

「も然り」

身は罪にも亦た福にも汚されず 悉く已に斷ず  
るも自らを譽へず

(四) 悉く上を棄てて後を念ずる莫かれ 是の行有ら

ば四海を度る

直ちに行き去りて苦を念ずる莫かれ 念ずる所

有らば意便ち縛せらる

(五) 常に覺意して戒を守りて行じ 上の行に在りて

彼の苦を想ふ

本念を念じて稍く行に入り 矯言せずして審か

に黠有り

(六) 一切法に疑有る無し 見聞にも亦た所念に至る

までも「然り」

諦かに見聞し力根を行ぜば 誰か世の是の六衰

を作さん

(七) 身を念ぜず尊を念ぜず 亦た行じて淨に至るを

願はず

恩怨斷じて所著無く 世願を斷じて所著無し

(八) 有つ所無きを梵志と爲す 法を聞見して便ち直

ちに取り

姪と不姪と汚姪に著するは 已に是れ無ければ  
當に淨に著すべけんや

佛、是の義足經を説き竟りたまひしに、比丘悉く歡喜  
しき。

鏡面王經第五

聞如是。佛在舍衛國祇樹給孤獨園。衆比丘以食時持應器  
入城欲求食。自念言。今入城甚早。我曹寧可到異梵志講  
堂。與相勞徠便就坐。是時諸梵志自共諍。生結不解轉相  
謗怨。我知是法。汝知何法。我所知合於道。汝所知合何  
道。我道法可猗行。汝道法難可親。當前說著後說。當後  
說反前說。多說法非與。重擔不能舉。爲汝說義不能解。  
汝定知法極無所有。汝迫復何對。以舌戟轉相中害。被一  
毒報以三。諸(178b)比丘聞子曹怨言如是。亦不善子  
言。亦不證子曹正。各起座。到舍衛求食。食竟舉藏應  
器。還到祇樹入園。爲佛作禮。悉坐一面。便如事具說。

念は曹梵志學自苦。何時當得解。

鏡面王經第五

聞きしことは是くの如し。佛、舍衛國 祇樹給孤獨園に在しき。

衆比丘、食時を以て應器(15)を持し、城に入りて食を求めんと欲し、自ら念言すらく、「今、城に入ること甚だ早し。我曹われら、寧ろ異梵志の講堂に到り、與ともに相ひ勞徠して便ち坐に就く可し」と。

是の時、諸梵志自ら共に諍ふ。「結を生ぜば解せずし

て、轉うたた相ひ謗怨す」「我れ是の法を知れり。汝、何の法を知る」「我が知る所は道に合す。汝が知る所は何の道に合する」「我が道法は狩りて行ず可し。汝が道法は親おやづく可きこと難し」「當に前に説くべきを後に著けて説き、當に後に説くべきを反かへて前に説けり」「多く法を説けども與くみするに非ず」「重擔は擧ぐる能はず」「汝が爲に義を説けども解する能はず」「汝、定んで法を知れども極めて有たもつ所無し」「汝、迫られて復た何をか對こたふ」と。舌戟を以て轉た相ひ中害し、一の毒を被らば、報いるに三を以てせり。

諸比丘、子曹の怨言を聞くことの是くの如きにして、

- (8) 「力根」は力有る根、即ち六根のことか。だとすると、下の「六衰」は六根の衰亡の意か。或いは「力根」は、信・勤・念・定・慧の五根・五力か。「行」の目的語としてはこの方が相応しいが、しかし、そうすると、「六衰」が不明。
- (9) 宋・元・明の三本は「經」を欠く。
- (10) 宋・元・明の三本は「争」。今は同義。
- (11) 宋・元・明の三本は「倚」。今は同義。
- (12) 「大正」の「汝定知法極無所有」を、宋・元・明の三本は「汝定知汝極無所有」とする。こちらを採ると、「汝定んで知れども、汝に極めて有あつ所無し」となる。
- (13) 宋・元・明の三本は「悪言」。
- (14) 「大正」の「如事具説」を、宋・元・明の三本は「如是事具説」とする。こちらを採ると、「是くの如き事を具さに説き」となる。
- (15) この「以」は locative を表す助字。

亦た子の言を善しとせず、亦た子曹の正しきを證せざりき。

各おの座より起ち、舍衛に到り食を求む。食し竟り應器を舉藏し、還りて祇樹に到り、園に入る。佛の爲に禮を作して、悉く一面に坐し、便ち事の如く具さに説きて、是曹これらの梵志の學びて自ら苦めるを念ずらく、「何れの時に當に解することを得べき」と。

佛言。是曹梵志非一世癡冥。過去久遠是閻浮利地有王。名曰鏡面。時勅使者。令行我國界無眼人悉將來至殿下。使者受勅即行。將諸無眼人到殿下。以白王。王勅大臣。悉將是人去示其象。臣即將到象廡。一一示之令捉象。<sup>(16)</sup>有捉足者。尾者尾本者腹者脇者背者耳者頭者牙者鼻者。悉示已。便將詣王所。王悉問。汝曹審見象不。對言。我悉見。王言。何類。中有得足者言。明王。象如柱。得尾者曰。如掃帚。得尾本者言。如杖。<sup>(18)</sup>得腹者言。如埵。得脇者言。如壁。得背者言。如高岸。得耳者言。如大箕。得頭者言。如臼。得牙者言。如角。得鼻者言。如索。便復<sup>(19)</sup>於王前共諍訟。象諦如我言。

佛のたまは言く、——是曹の梵志、一世に癡冥なるに非ず。過去久遠に、是の閻浮利の地に王有り。名づけて鏡面と曰ふ。時に、使者に勅すらく、「我が國界を行き、無眼人をして悉く將來し殿下に至らしめよ」と。使者、勅を受けて即ち行き、諸の無眼人を將ゐて殿下に到り、以て王に白す。

王、大臣に勅すらく、「悉く是の人を將ゐて去り、其の象を示せ」と。臣、即ち將ゐて象廡に到り、一一之に示し、象を捉へしむ。足を捉ふる者、尾なる者、尾の本なる者、腹なる者、脇なる者、背なる者、耳なる者、頭なる者、牙なる者、鼻なる者有り。悉く示し已り、便ち將ゐて王所に詣る。王、悉く問はく、「汝曹、審に象を見たりや不や」と。對へて言く、「我、悉く見たり」と。王言く、「何にか類す」と。中に足を得たる者有りて言く、「明王。象は柱の如し」と。尾を得たる者曰く、「掃帚の如し」と。尾の本を得たる者言く、「杖の如し」と。腹を得たる者言く、「埵の如し」と。脇を得たる者言く、「壁の如し」と。背を得たる者言く、「高き岸の如し」と。耳を得たる者言く、「大箕の如し」と。頭を得たる

者言く、「白の如し」と。牙を得たる者言く、「角の如し」と。鼻を得たる者言く、「索ふといの如し」と。便ち復た王の前に於て共に諍訟すらく、「象は諦あやまかに我が言の如し」と。

ひ怨む

王是時説偈言。  
今爲無眼會 空諦自謂諦  
見一言餘非 坐一象相怨

佛告諸比丘。是時鏡面王者。即我身是。時無眼人者。即講堂梵志是。是時子曹無智坐空諍。今子曹亦冥空諍無所益。佛是時生是義。具檢此卷。令弟子悉解。爲後世作明。令我經道久住。說是義足經。

王、是の時、偈を説きて言く、

今爲無眼會 空諦自謂諦  
見一言餘非 坐一象相怨

今無眼の會を爲すに 空しき諦を自ら諦なりと謂

ふ  
一を見て餘は非なりと言ひ 一に坐りて象もて相

佛、諸比丘に告げたまはく、「是の時の鏡面王なる者は、即ち我が身是れなり。時の無眼人は、即ち講堂の梵志是れなり。是の時の子曹の無智にして坐し空しく諍ふは、今の子曹の亦た冥く空しく諍ふて益する所無きなり」と。

佛、是の時、是の義を生じたまふ。「具そとさに此の卷を檢しらべ、弟子をして悉く解せしめ、後世の爲に明と作り、

(16) 宋・元・明の三本は「持」。こちらだと「持たしむ」。

(17) 宋・元・明の三本は「牙鼻者」とする。

(18) 宋・元・明の三本は「枝」。

(19) 『大正』には「於王前共諍訟」とあるが、宋・元・明の三本は「於持前共諍訟」とする。こちらを採ると、「持なてるに於て、前みて共に諍訟す」となる。

我が經と道とをして久しく住せしめん」とて、是の義足<sup>(20)</sup>經を説きたまふ。

佛説是義足經竟。比丘悉歡喜。

(一)自ら冥にして是を言ふ、彼れ及ばず、と

癡に著きて日に漏らせば、何れの時にか明ならん

自ら道無くして謂ふ、學は悉く爾り、と

但だ亂れて行無くば、何れの時にか解せん

(二)常に自ら尊行を得たりと覺し 自ら行は無比なり

と聞見せば

已に墮して世の五宅<sup>(26)</sup>に繋せり 自らを奇しむ可

し、行は彼に勝るるやと

(三)癡を抱き姪に住して善を致すも 已に邪に學べば

度を得るに蒙<sup>くも</sup>し

見聞する所を諦かに受け思ひ 戒<sup>むす</sup>を持つと雖も可

と謂ふ莫かれ

(四)世に行ずるを見るも悉くは修する莫かれ 黠<sup>あや</sup>もて

亦た彼の行ずるを念ずと雖も

行を興すは等しくとも亦た敬待すべし 想を生ず<sup>(27)</sup>

る莫かれ「及ばず」「過ぎたり」と

(五)是れ已に斷てば後も亦た盡<sup>つ</sup>き 亦た想を棄て獨り

<sup>(21)</sup> 自冥言是彼不及 著癡日漏何時明

自無道謂學悉爾 但亂無行何時解

常自覺得尊行 自聞見行無比

<sup>(22)</sup> (178c) 已墮繫世五宅 自可奇行勝彼

抱癡住姪致善 已邪學蒙得度

所見聞諦受思 雖持戒莫謂可

見世行莫悉修 雖黠念亦彼行

興行等亦敬待 莫生想不及過

是已斷後亦盡 亦棄想獨行得

莫自知以致黠 雖見聞但行觀

悉無願於兩面 胎亦胎捨遠離

亦兩處無所住 悉觀法得正止

意受行所見聞 所邪念小不想

慧觀法竟見意 從是得捨世空

<sup>(23)</sup> 自無有何法行 本行法求義諦<sup>(24)</sup>

<sup>(25)</sup> 但守戒求爲諦 度無極衆不還



行きて得

自ら知れども以て黠を致すとす莫く 見聞すと

雖も但だ観を行ずるのみ

(七) 意・受行・見聞する所 邪に念ずる所を小なるす  
ら想はず  
慧もて法を觀じて見・意を竟む 是の得たるに従

(六) 悉く兩面を願ふこと無く 胎より亦た胎なるも捨

てて遠離し けて遠離し 胎より亦た胎なるも捨

てて遠離し

(八) 自らに何なる法・行も有る無く 行法を本として

亦た兩處に住まる所無し 悉く法を觀じて正しき

義諦を求むるも「有る無し」

を得て止む

但だ戒を守るのみにして諦と爲すを求むるも「然

(20) Cf. Sn.796-803.

(21) 最初の四句のみ七言、以下は六言で訳出されている。(E) a句が「二・二・二」となる以外、それぞれ七言は「四・三」、六言は「三・三」の節奏が守られている。こういう点からも支謙の翻訳姿勢を覗うことができる。(E) a句の節奏の乱れについては次註も参照されたい。

(22) 宋・元・明の三本は「抱癡住望致善」。こちらだと「癡を抱きて住まり望みて善を致すも」と節奏を守った読みが出来る。節奏が崩れているのは第五経ではこのみなので、三本のテクストを採るべきかもしれない。

(23) 宋・元・明の三本は「自何無有待待」とする。こちらは訓みづらいが、「自ら何ぞ法として待つこと有る無からん」と訓むか。

(24) 宋・元・明の三本は「議諦」とする。こちらは「諦を議する」。

(25) 「大正」も諸本も「但守戒求爲諦」とするが、この「求」を『磧砂藏』は「未」とし、『大正』の底本の加点者が「求」を「未」としている。これを採ると「但だ戒を守るのみを未だ諦と為さず」と訓むことができるので、この句だけであれば意味は通じやすいが、(八)は、初句の「有る無し」が以下の句を支配していると考えられるので、孰れでも読むことが出来る。五宅 五蘊乃至五趣を指すか。

(26) この句は上の句にかかると雖も…修する莫かれ」と繋がるのである。

(27) 「両面」は一辺、両極端のこと。

(28) 胎より亦た胎なるも 輪廻のこと。「胎」とは言っているが、卵・湿・化生を含んでいると理解すべきであろう。

(29) 正しきを得て止む 或いは「正しき止を得」か。「正しき止」と理解する場合の「止」は「止観」の止。

り」 無極に度して衆は還らざればなり

佛、是の義足經を説き竟りたまふに、比丘、悉く歡喜しき。

老少俱死經第六

聞如是。佛在娑掃國城外安延樹下。時有一行車人。出城未到安延樹。車轂道敗。便下道一面。悵愁而坐。佛是時持應器從阿難入城求食。道見車轂敗壞。其主下道坐悵愁不樂。即説是優檀經。

如行車於道 捨平就邪道  
至邪致憂患 如是壞轂輪  
遠法正亦爾 意著邪行痛  
愚服死生苦 亦有壞轂憂

老少俱死經第六

聞きしことはくの如し。佛、娑掃國城外の安延樹下に

在しき。

時に、一の車を行むる人有り。城を出でて未だ安延樹に到らざるに、車轂、道に敗る。便ち道の一面に下り、悵愁して坐せり。

佛、是の時、應器を持し、阿難を従へ、城に入りて食を求めたまふ。道に車轂敗壞し、其の主、道に下り坐して悵愁し樂まざるを見し、即ち是の優檀經を説きたまふ。

車を道に行むるに 平なるを捨て邪道に就かば  
邪に至り憂患を致すが如く 是くの如く轂輪を壞す  
法を遠くるも正に亦た爾り 意 邪行の痛なるに  
著けば  
愚かに死生の苦を服し 亦た轂を壞す憂有らん

佛便入城。城中時有一梵志死。壽年百二十死。復有一長者子。年七歳亦死。兩家俱送喪。皆持五綵幡。諸女弱皆被髮。親屬啼哭悲淚。佛見因問阿難。是何等人聚會。悲

哀聲甚痛。阿難即如事對。佛因是本。有生是義。(19)  
 〇令我弟子悉解檢是卷。爲後世作明。令我經法久住。  
 時佛說是義足經。

佛、便ち城に入りたまふ。

城中に、時に一梵志の死する有り。壽年百二十にして  
 死す。復た一長者子有り。年七歳にして亦た死す。兩家  
 俱に送喪し、皆五綵の幡を持てり。諸の女弱は皆被髮  
 し、親屬は啼哭悲涙せり。

佛見そなはし、因を阿難に問ひたまふ。「是れ何等の  
 人の聚會なる。悲哀の聲、甚だ痛し」と。阿難、即ち事  
 の如く對ふ。佛、是の本に因りて、是の義を生ずる有  
 り。「我が弟子をして悉く解せしめんがため、是の卷を  
 檢べ、後世の爲に明と作し、我が經法をして久住せしめ  
 ん」と。

時に佛、是の義足經を説きたまふ。<sup>(39)</sup>  
 是身命甚短 減百年亦死<sup>(40)</sup>

- (31) 宋・元・明の三本は「經」を欠く。  
 (32) 「大正」の「婆掃國」を、宋・元・明の三本は「婆掃國」とする。  
 (33) 「大正」は「悵愁」とするが、宋・元・明の三本は「抱愁」とする。こちらを採ると、「愁を抱いて」となる。次行末も同様。  
 (34) 宋・元・明の三本は「生死」。  
 (35) 一面 *ekāna* を直訳してこう訳す。すなわち「道一面」は「道の端っこ」「道ばた」ほどの意。「一面」はほとんど *ekāna* の定訳語化しており、しばしば現れる「坐一面」や「二面住」等も同じ。この場合は「邪魔にならない」片隅に坐る」ほどの意。  
 (36) 「大正」は「有一梵志死」とするが、宋・元・明の三本は「有一梵志」である。文脈に影響はない。  
 (37) 女弱 女性と若年者。  
 (38) 被髮 髪を結わずにザンバラに落とし、また冠をつけないこと。  
 (39) Cf. Sn. 804-813.  
 (40) 冒頭(一)の八句を五言、以下を六言で訳出している。五言の部分の節奏は(一)b・d句でのみ「三・二」となっているが、あとは「二・三」を守っている。六言の部分も概ね「三・三」で統一されている。

雖有過百年 老從何離死

坐可意生憂 有愛從得常

愛憎悉當別 見是莫樂家

死海無所不漂 宿所貪愛有我

慧願觀諦計是 是無我我無是

是世樂如見夢 有識寤亦何見

有貪世悉亦爾 識轉滅亦何見

聞是彼悉已去 善亦惡今不見

悉捨世到何所 識神去但名在

既悲憂轉相嫉 復不捨貪著愛

尊故斷愛棄可 遠恐怖見安處

比丘諦莫妄念<sup>(41)</sup> 欲可遠身且壞

欲行止意觀意 已垂諦無止處

無止者亦尊行 愛不愛亦嫉行

在悲憂亦嫉行 無濡沾如蓮華<sup>(42)</sup>

已不著亦不望<sup>(43)</sup> 見聞邪吾不愛

亦不從求解脫 不汚姪亦何貪<sup>(44)</sup>

不相貪如蓮華 生在水水不汗<sup>(45)</sup>

尊及世亦爾行 所聞見如未生

佛說是義足經竟。比丘悉歡喜。

(一) 是の身 命は甚だ短かく 百年を減じて亦た死す<sup>(46)</sup>

百年を過ぐる有りと雖も 老ひて何に従りて死を

離れんや

(二) 坐ながらに意に憂を生ず可し 愛有るも「何に」

従りて常なるを得んや

愛憎は悉く當に別かるべし 是を見て家を樂ふこ

と莫かれ

(三) 死海に漂はざる所無し 宿貪る所は我有るを愛<sup>(47)</sup>

せばなり

慧もて觀ずるを願ひ諦かに是を計さば 是れに我

無く我に是れ無し

(四) 是の世の樂は夢を見るが如し 識の寤むる有らば

亦た何をか見ん

世を貪る有るも悉く亦た爾り 識轉た滅せば亦た

何をか見ん

(五) 是れ彼なりと聞くも悉く已に去り 善も亦た惡も

今は見ず

悉く世を捨てなば何所に到らん  
名のみ在り  
識神去れば但だ

(六)既に悲憂して轉た相ひ嫉み 復た貪著の愛を捨て

尊は故に愛を斷じ可なるを棄て 恐怖を遠ざけ  
安處を見る

(七)比丘は諦かにして妄念莫く 遠ざかる可く欲して

身は且に壞せんとす 已に諦を垂へて  
行止せんと欲し意に意を觀ぜば

(八)止まる無きは亦た尊の行なり 愛と不愛と亦た嫉

行とに「止まる無し」

悲憂と亦た嫉行とに在りて 濡沾する無きこと蓮  
華の如し

(九)已に著せず亦た望まず 見聞は邪なれば吾れ愛せ  
ず 亦た從りて解脱を求めず 姪に汚されずば亦た何  
をか貪らん

(十)相ひ貪らざること蓮華の如し 「蓮華は」生じて

水に在るも水に思されず 尊は世に及びて亦た爾く行ずれども  
未だ生ぜざるが如し 聞見する所

- (41) 宋・元・明の三本では「忘念」。こちらは「念を忘るる莫く」。
- (42) 「大正」は「濡沾」（濡れそぼつこと）で分かりやすいが、宋・元・明の三本には「輒沾」とある。「輒」は「軟」の正字。「積砂藏」にも「粟」とあり、単なる写誤とは考えづらい。「弱め濡らす」ほどの意に取るか。
- (43) 宋・元・明の三本は「已不著亦可望」とする。こちらを採ると「已に著せざれば亦た望む可し」となる。
- (44) 明版では「淫」に作る。同義。
- (45) 宋・元・明の三本では「于」。同義。
- (46) 百年を減じて 百年以下で、精々百年で、の意。但しこの「減」は「以上」の意味でも使われるので注意。例えば「減百劫」は「少なくとも百劫」「百劫以上」を意味する場合もある。この場合は「減ずとも百劫」と訓む。
- (47) 原文は「宿所貪愛有我」。「三・三」の節奏を尊重してこのように訓んだが、研究会のメンバーから、「貪」と「愛」との連続を重視して、「宿より貪愛する所に我有り」と訓んでどうか、という異見もあった。
- (48) 識神 アートマン (aman)。

佛、是の義足經を説き竟りたまひしに、比丘、悉く歡喜しき。

彌勒難經第七<sup>(49)</sup>

聞如是。佛在王舍國多鳥竹園中。時衆老年比丘在講堂坐行內事。轉相問法。采象子字舍利弗。亦在座中。聞說內事律法難問。問不隨律言。亦無禮敬。是時賢者大句私亦在座中。便謂舍利弗言。無。弟。勿於（179b）老年比丘有所疑。隨所言恭敬先學。廣爲舍利弗說定意經。如有賢者子發道。久在家生意。復念淨法。便除鬚髮已。信捨世事。被法衣作沙門。精進行。附正離邪。已證爲行。自知已度。時賢者彌勒。到舍利弗家。舍利弗便爲彌勒作禮便就座。彌勒即如法律難問。舍利弗冥<sup>(51)</sup>於是事不能對。彌勒便起去。入城求食竟。盥澡<sup>(52)</sup>藏應器。還到佛所。作禮畢就座。以偈問佛言。

彌勒難經第七

聞きしことはくの如し。佛、王舍國 多鳥竹園中に在<sup>ましま</sup>しき。

時に、衆の老年の比丘、講堂に在り、坐して内事を行い、轉た相ひ問法す。采象子、字は舍利弗なるも亦た座中に在り。内事・律法を説くを聞きて難問するに、問、律の言に隨はず、亦た禮敬する無し。

是の時、賢者大句私も亦た座中に在り。便ち舍利弗に謂ひて言く、「無かれ、弟。老年比丘に於て疑ふ所有る勿れ。所言に隨ひて先學を恭敬すべし」と。廣く舍利弗の爲に定意經を説けり。「賢者子有りて道「意」を發<sup>た</sup>すが如し。久しく家に在れども意を生じ、復た淨法を念じて、便ち鬚髮を除き已り、信に世事を捨て、法衣を被、沙門と作りて精進して行じ、正しきに付き邪を離れば、已に行を爲せるを證し、自ら已に度れりと知る」と。

時に、賢者彌勒、舍利弗の家に到るに、舍利弗、便ち彌勒の爲に禮を作し、便ち座に就けり。彌勒、即ち法律の如くに難問せり。舍利弗、是の事に冥<sup>こた</sup>して對ふる能はず。彌勒、便ち起ちて去り、城に入りて食を求め竟

り、盥澡して應器を藏む。還りて佛の所に到り、禮を作し畢り座に就き、偈を以て佛に問ふて言す。

常行與慧合 寧獨莫亂俱

著色生邪亂 無勢亡勇猛

漏戒懷恐怖 受短爲彼負

已著入羅網 便欺出奸聲

見犯因緣惡 莫取身自負

堅行獨來去 取明莫習癡

遠可獨自處 諦見爲上行

有行莫自憍 無倚泥洹次

遠計念長行 不欲色不色

(179c) 善說得度痛 悉世姪自食

佛說是義足經竟。比丘悉歡喜。

見是諦計學 所姪遠捨離  
且思色善惡 已犯當何致  
聞慧所自戒 痛慚却自思

- (49) 宋・元・明の三本は「經」を欠く。
- (50) 「大正」には「久在家生意復念淨法」とあるが、元・明・『磧砂藏』の三本には「久在家至意復念淨法」とある。こちらを採ると「久しく家に在れども、意の復た淨法を念ずるに至り」となる。
- (51) 「大正」には「冥於是事不能對」とあるが、宋・元・明の三本は「宜於是事不能對」とする。『磧砂藏』にも「宜於是事不能對」とあり、単なる写誤とは考えづらい。訓みづらいが、「宜しく是の事に於て對ふる能はず」と訓むか。
- (52) 宋・元・明の三本には「已」藻藏應器」とある。こちらを採ると、「已に應器を藻ひ藏む」となる。
- (53) Cf. Sh. 814. 823. 「からは、彌勒の問に對する仏の答え。
- (54) 宋・元・明の三本は「邪」。この「邪」は、「耶」と同じく疑問・反語の助辞。

(一) 姪欲もて女形に著くを (55) 大道 癡根を解きたまへ

願はくは、尊の戒しむる所を受けんことを 教を得

て行じて悪を遠けん

(二) 意に姪女の形に著かば 尊の教令したまふ所を亡

ひ

正「道」を亡ひ睡臥を致さん 是の行 次第を失

ふなり

(三) 本獨りにして 行きて諦を求むるに 後に反きて

色に著して亂るるは (56)

犇車の正道を亡ふがごとし 存して正を捨てざら

んや (57)

(四) 値に坐し尊敬せらるるも 行を失へば善名を亡ふ

是を見て諦かに學を計し 姪する所を遠け捨離せ

よ (58)

(五) 且く色の善惡を思ひ 已に犯せば當に何をか致す

べき

聞慧もて自ら戒むる所を 痛く慚ぢて却け自ら思

へ

(六) 常に行じて慧と合し 寧ろ獨りにして 亂るるこ

と俱なる莫きも

色に著かば邪を生じて亂れ 勢無く勇猛を亡ふ

(七) 戒を漏らさば恐怖を懷き 短を受け彼の負と爲る

已に著せば羅網に入り 便ち欺りて奸聲を出す

(八) 因縁たる惡を犯すを見て 取りて身自ら負ふこと

莫かれ

堅く行じて獨り來去し 明を取りて癡を習ふこと

莫かれ

(九) 可「愛」なるを遠ざけ獨り自ら處し 諦かに見る

を上行と爲す

行有るも自ら憍ぶること莫かれ 倚ること無きは

泥洹に次ぐ

(十) 「聖者は」遠く計して長行を念じ 色不色を欲せ

ず

善く説きて痛を度ることを得たり 悉く世は姪し

て自ら食す

佛、是の義足經を説き竟りたまひしに、比丘、悉く歡喜しき。



- (55) 大道 仏に対する尊称。
- (56) 犇車 驚き走り出した牛の引く車。
- (57) 値に坐し尊敬せらるるも「価値あるものとして存在し皆から尊敬されていても」ほどの意。